

第6章 まとめ

1. 好事例の特徴の整理

第5章で見た好事例には、事業実施上、幾つの特徴が含まれている。それらの特徴を整理すると、以下のとおりとなる。

(1) 企業・学校・住民との連携

・地元企業や地元住民、NPO を巻き込んで事業を実施すると事業に広がりが出る。

(2) 福祉部門との連絡・連携

・高齢者と接点が多い民生委員を介すると、自宅にこもりがちな高齢者へ周知しやすい。

(3) 公共交通機関との連携

・高齢者による自動車運転を抑制するため、公共交通を利用しやすくする。

(4) 孫世代との交流

・高齢者は、大人からの呼びかけに比べ、子供からの呼びかけを聞き入れやすい。

(5) 話題作り・メディアの活用

・特徴ある施策を実施し、メディアを通じて報じてもらおうと、家庭で交通安全の話をするきっかけとなりやすい。

(6) 最新機材の利用

・地元立地の企業から、シミュレーター等の機材を借り入れて実践的講習を行うと、交通安全に対する意識が高まる。

(7) 他の催事機会を利用

・高齢者クラブの月例会や地区の運動会など、他の行催事の一部を利用して講習等を実施すると、効率的である。

第5章の好事例で取り上げた各取組について、上記(1)から(7)に該当する取組を当てはめると、次の図表のとおりとなる。

図表 6-1 好事例に含まれる特徴の整理

	企業・学校・住民 を巻き込み	福祉部門との 連携	公共交通機関 との連携	世代間交流	話題作り・メディア の活用	最新機材 の利用	催事の活用
(1) 交通安全教室・講習会							
【事例1】高齢者向け交通安全教室(北海道江別市)		○					○
【事例2】世代間交流ドライビングスクールなど(富山県滑川市)	○			○	○		
【事例3】世代間交流交通安全教室(山形県山辺町)	○	○		○			○
【事例4】高齢者運転講習会(長崎県)	○					○	
【事例5】「秋の全国交通安全運動」石岡地区交通安全総決起大会(茨城県石岡市)					○		○
【事例6】高齢者対象の出前講座(福岡県宇美町)							○
【事例7】交通安全専門指導員事業(鹿児島県霧島市)		○				○	
【事例8】世代間交流交通安全教室(岐阜県郡上市)	○			○			
(2) 交通安全グッズ・冊子の作成・配布							
【事例9】出前講座(交通安全講話)等におけるゆるキャラ活用型交通安全(愛知県豊川市)					○		
【事例10】反射材ファッションショーの開催(富山県射水市)	○			○	○		
【事例11】高齢者交通事故防止総合対策事業(長崎県)	○	○					
【事例12】警察署との協力による自転車装着用後方確認ミラー配布事業(千葉県柏市)							○
(3) 高齢者訪問							
【事例13】高齢者世帯訪問事業「お達者訪問大作戦」(埼玉県)	○	○					
【事例14】防犯・交通安全啓発高齢者訪問事業(長崎県五島市)	○	○		○			
(4) 運転免許返納支援							
【事例15】高齢者運転免許証自主返納支援事業(山形県村山市)			○		○		
【事例16】高齢者運転免許自主返納支援事業(富山県氷見市)	○		○		○		
(5) その他							
【事例17】地元金融機関・商店との協力による高齢者宅訪問・啓発事業(北海道帯広市)	○	○					○
【事例18】セーフティリーダー認定制度(新潟県長岡市)	○					○	
【事例19】シルバーメール作戦事業(福島県)	○			○			
【事例20】交通事故を減らすまちづくりプロジェクト(愛媛県松前町)	○						

2. 想定していた効果・成果が得られなかった要因・課題に対応する好事例での参考となる取組

第5章で取り上げた取組の好事例からは、第4章で取り上げた「想定していた効果・成果が得られなかった要因・課題」に対応する対応策や教訓、示唆を導くこともできる。

「(1) こもりがち、または交通安全意識の低い高齢者の関心を高めることに課題のある例」に対しては、このような高齢者にアクセスする手段が問われる。例えば、日頃から独居高齢者と接点のある民生委員（福祉部門）との連絡・連携によって、高齢者にアクセスしやすくなる可能性がある。

「(2) 広報・啓発活動を行うべき対象、場所、時間の設定に課題のある例」に対しては、自治体の広報紙だけではなく、直接、高齢者クラブへの出前講座を行ったり、高齢者クラブの会長を通じて募集を呼びかける、SNS の活用など、あらゆるルートを使った営業活動が望まれる。

「(3) 講習内容を実践してもらうことに課題のある例」に対しては、最新機材を用いて身体能力の変化を体験する講習が有効である、という見方がある一方、身体能力の変化を体験すると、それを悲観的に捉え、精神的に落ち込んでしまい、交通安全講習に足を向けなくなる高齢者がいるという報告もある。また、孫世代と一緒に学習することによって、交通安全を意識と実践の両面から高めることができる、という指摘もあり、交通安全講習の内容を高齢者に実践してもらう可能性を高める工夫の余地はまだまだある、と言える。

「(4) 交通安全グッズ等の配布物を活用してもらうことに課題のある例」に対しては、デザイン性・ファッション性の高いものにすることや、配布だけではなくその場で添付したり器具を装着したりすること等により、利用率を高めてもらう工夫が必要になる。また、ゆるキャラなど、地域住民に親しまれているキャラクターを用いたり、メディアに取り上げてもらったりするなど、家庭での話題に挙げてもらえるようにする努力も必要になる。

「(5) 他機関・他事業との連携に課題のある例」については、高齢者が多く集まる他の行催事の機会を利用して交通安全講習を行うことが効率的である反面、振り込め詐欺防止の啓発など、他の内容に関心が行ってしまい、交通安全の意識向上のための啓発への関心が低下してしまうおそれもある。そのため、組み合わせるべき内容の検討が必要である。また、警察や交通安全協会との連絡・連携はもとより、ここでも孫世代からのメッセージが有効に機能する可能性がある。

「(6) 免許自主返納に際し、代替提供するモノの使い勝手に課題を抱える例」については、身分証代わりになっていた運転免許証に代替できるモノや、自家用車を運転しなくなる際に必要となる公共交通機関の利用勝手をどこまで高められるかが鍵になる。

「(7) その他の課題を抱える例」については、シニアリーダーを養成する上での工夫や、まちづくりの上での住民、企業の巻き込み方が問われる。